新春随想

私と中央会

関東プラスチック印刷協同組合
理事長　渡辺　武敏

明けまして、おめでとうございます。

本年も、よろしくお願いいたします。

「人間はいずれ死を迎えるのに、何のために生きるのか？」の質問に、前から２列目、順番が来たら何と答えようか、前の人は講師の質問に答えられていない。考えている間もなく、自分の番だ。私は「それを知るためです」と答えた。

自分の答えに、講師は冷めた口調で言った。「理屈どおりの答えだ」と。

27、8年前の東京都中小企業団体青年部協議会のセミナーでのことです。

講師はいまだ、記憶にある方がいらっしゃると思いますが、昭和43年の秋に東京、京都、函館、名古屋で警備員、タクシー運転手を相次いで射殺した連続凶行事件で翌年に逮捕された19歳の少年、永山則夫（平成２年に死刑が確定し、７年後に死刑）の拘置所での担当教戒師でした。

永山則夫は中学校にも満足に通えず、18、19歳まで他人はもちろん、親の愛情も知らない、不遇な生い立ちでした。拘置所内で世間知らずの自分になぜ、もっと早く生きることの大切さや意義、人生について誰も教えてくれなかったのかと嘆き、その後、カントやマルクスなどの書物を読む彼との関わりの話は衝撃的で、自分の人生にとって意義深い講話でした。

また、このセミナーを主催した青年部協議会を運営している仲間が非常に良い雰囲気で活躍されていて、なぜか印象が良かったことを思い出します。

これが、私の中央会との関わりのはじめでした。

その後、催事への参加率が高かったためか、しばらくすると青年部協議会の理

事に、そして副会長に、退会するまでの４、５年間、異業種の青年部の皆さんと工場見学、太鼓持ち（幇間）との観光旅行での会話、セミナー、他県青年部との交流など、多くの方々と関わることができ、いろいろと勉強させていただきました。

なかでも、長野県で行われる関東甲信越静ブロック会議へ参加する列車の中で話が弾み、仕事が趣味、好きという話題で「やらなきゃならないと思うが、趣味、好きになれない」との私の発言に、即座に、「渡辺さん、給料が安いのだよ！」との初代会長の故石森先輩の言葉は今でも、私の経営の中で生き続けております。

間もなく、親父（創業者）の給料を相当上げ、自分も上げた。それでもちゃんと給料を払えるようになる、仕事が面白くなる、上司が給料を上げて喜ぶのだから、社員はもっと上げて欲しいのは当たり前だ、と思える。

そのためには何をすべきか、いろいろ考えることが、また楽しい。

また、太鼓持ちの話は人を楽しませるために、そこまでやるのか、と思うほど徹底する、徹し切れる様を楽しく、感心しつつ聞かせていただきました。

なお、青年部協議会に在籍し、会長をつとめた方には現在、財団法人　日本オリンピック委員会の副会長、専務理事として活躍中の林　務氏がいます。

また、当時の青年部協議会の事務局を担当していた東京都中小企業団体中央会の堀内　忠・専務理事には大変お世話になりました。

世代交代で青年部協議会を退会した同時期に、私どもの組合の青年部も後継不足により解散となり、記念行事以外はご無沙汰となりました。（現在、次世代の若者は同業他組合の青年部に統合し、活躍中です。）

その後、組合の役員になり、全国中央会の全国大会（順不同、横浜、徳島、宮崎、沖縄、山形、長野、東京、埼玉、横浜、東京）には、数多く参加させていただき、全国各地から集まった数千人の仲間の熱気を感じ、郷土芸能を楽しみ、道中の組合の仲間との会話も楽しく、有意義なことでした。

現在は、東京都中央会の評議員、理事を務めさせていただいた先輩理事長の後、図らずも大役をいただき、素晴らしい諸先輩方と戸惑いながらも、お役に立つよう努めさせていただいております。

若かりし時の思い出深い、人との関わりが、今の自分自身の糧になっていることに感謝する次第です。

新春随想

新年は「反省」と「希望」で迎える

赤帽首都圏軽自動車運送協同組合
理事長　小林　則夫

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

横浜市保土ヶ谷区に住居を構えて三十一年、毎年新しい年を「ヨコハマ港」に停泊する船が新春を祝うために一斉に放つ“霧笛”を聞きながら迎えることにしています。

新年は過ぎし一年の様々な出来事を思いながら、「反省」とそして新たに始まる新しい年に「希望」を抱きながら、気持ちを切り替えて過ごすことにしていますが、とりわけ私たち運送業に携わる者にとっては燃料の高騰や駐車対策、そして各企業における経費の節減等があり、厳しい一年になると覚悟しています。

私は昭和五十二年に赤帽組合に加入し、運送業のスタートを切りましたが、今考えると全くの未経験の分野によく飛び込んだものと我ながら感心します。また同期で加入したほとんどの人が二十代後半から三十代の人で、もちろん私と同じく運送業の未経験者でした。

当時は独立して商売を、と思う人が多かったわけですが、この仕事を始めて一番思うことは、独立する前の七年間の会社員生活で様々なことを学び、そして経験をさせていただいたことが今日につながっているということで、深く感謝しています。

大阪万博が開催された昭和四十五年に旅行会社に勤務しました。辞令は接待代理事業部営業課となっていました。当時は企業がお得意様に対して、販売促進の一環として招待旅行や観劇会、懇親パーティーなどが盛んに行われていました

が、その企画立案から実施まで企業の担当者に代わってお世話をするというものです。結果として大事なお得意様に満足していただき、企業とお得意様の関係がよりスムースになることが目的ですから、失敗は許されません。

たとえば、タイヤメーカーの旅行でバスを利用するときは、そのメーカーのタイヤを使用するようにバス会社にお願いするわけです。お客様との交渉やホテル・旅館の担当者、時には芸能人との打ち合わせなど、様々な人との貴重な体験をいたしました。また勤務先からは企業における組織論や理念、そして上司や先輩、同僚、後輩との関係など色々と経験をさせていただきました。この経験がその後の私の人生に大いに役立ち、三十年以上経過した今、特に感謝の気持ちの念が強くなりました。

前述したように昭和五十二年に赤帽人生をスタートしましたが、そのとき「自分自身の中に違う仕事をしてみたい」、「自分の生き方を変えてみたい」という気持ちが湧いてきました。

たまたま見た週刊誌に「赤帽」という新しい形態の運送業が個人で開業できるという記事が出ていました。なんとなく「自分でも出来そうだな」という軽い気持ちで連絡を取ったところ、創始者の松石俊男会長が直接面接をしていただけるとのことで、江東区冬木町の当時の赤帽本部事務所を訪問しました。

ここで、松石俊男会長から最初に言われた言葉は「仕事の世話はせんよ。仕事は君が探すのだ。でも君が獲得した仕事はすべて君の売り上げになるのだからいいだろう。まあ、頑張りなさい」というもので、その自信に満ちた、説得力のある語り口調に圧倒されて面接は終了です。この言葉のなかには自営業者としての厳しさや「努力をしなければ成功はしない」という重要な意味があったわけですが、決して落ち込むことはなく、逆に勇気付けられたものです。

赤帽に加入して二十九年になります。現在は組合専従職となっていますが、専従職になる前の十数年はお客様の要望に百パーセント応えることを目標に頑張ってきました。このとき、お客様の「困ったときの赤帽」になろうと心に決めました。まず、仕事は断らない。そうすれば必ず結果があらわれると思いました。現在も組合員全員がこの気持ちを大事にして頑張っています。

赤帽は昭和五十年五月に東京都練馬区で第一号車が誕生しました。その基本目

的は「庶民の庶民による庶民のための運送業」。そして営業精神は「荷主さんの心を運ぶ赤帽車」「礼儀・親切・信頼」です。平成十六年に理事長に就任の際、組合員の皆さんに「お客様第一主義」の精神をもう一度、一人ひとりが見つめ直すことをお願いしました。

赤帽も誕生から三十一年を経過して皆様から「軽貨物運送の赤帽」と認めていただくようになりましたが、最近はただ荷物を運べばよいのではなく、お客様のサービス評価基準や要求が大変厳しくなっていますから、確実性や正確性に対する期待である「信頼性や安心感、心配り」、「車輌やサービス提供者の態度や身だしなみ」、「気配りや配慮」などが重要になってきています。すなわち組合員一人ひとりが商品であるわけですから、それぞれの個性や特徴を「運ぶプラスα」でお客様に表現し、アピールしていかなければなりません。

今、社会現象の中で若者の就職難やニート、そして2007年問題という団塊の世代の定年大量離職が問題になっていますが、この裏には団塊ジュニアの若年層も控えています。赤帽は若い人の力を必要とする一方で、また団塊世代の豊富な知識や経験も必要としています。こうした中高年年齢層や若年層の方々を赤帽は積極的に受け入れています。

ともあれ、過ぎ去った昨年一年に感謝し、迎えた新しい年も、首都圏の組合員が無事故・健康で、幸多かれと祈らずにはおられません。本年も皆様方の一層のご愛顧とご指導のほどお願い申し上げます。

新春随想

浦安鉄鋼団地の「地区計画」

浦安鐵鋼団地協同組合
理事長　関根　宏一

新年、明けましておめでとうございます。皆さま、つつがなく新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

さて、今回の景気拡大は「いざなぎ景気」を超えて、戦後最長記録を更新中とのことです。あまり実感は湧きませんが、確かに大企業は毎年史上最高の利益を出し、また、都内の一部では、バブル期を思い起こさせるような勢いで地価が上昇しているようです。

私ども、浦安鉄鋼団地が立地する浦安市でも、最近、地価の上昇が顕著です。都心まで20分という利便性と、日本最大のテーマパークの存在が人気を呼んでいるのだと思います。

浦安鉄鋼団地は、昭和38年に都内の鋼材業者が組合を設立し、千葉県と交渉の末、第一期の埋立ての完了した昭和43年に土地の分譲を受け、工場・倉庫の建設が始まりました。その後、昭和54年に第二期の埋立て地を購入し、現在の107ヘクタールの鋼材加工・流通基地の形ができ上がりました。用地の購入にあたっては、当時の組合幹部のたいへんな苦労がありました。まず、土地の代金は「千葉方式」と呼ばれる前払いであったため、引き渡しの５年前から、組合員より毎月集金し、分割で県に払い込みました。当時は、まだ海の底で姿を現していない土地に対して、支払いを続けるという厳しい条件を、組合員に納得させるということは、並大抵のことではなかったと思います。また、引き渡し後には、道路の建設、従業員用の住宅地確保、通勤手段確

保など、さまざまな問題を解決して、現在の浦安鉄鋼団地が完成したわけであります。

現在、当団地は227社、270の事業所が、年間550万トンの鋼材を扱う、首都圏における鋼材の加工・流通基地として機能しています。

昔は陸の孤島とも呼ばれた小さな漁師町だった浦安も、この40年あまりの間に大きく変貌しました。埋め立てによって面積は４倍、人口は約９倍になりました。また、地下鉄やJR京葉線の開通により、都心までわずか20分というたいへん便利な場所にもなりました。そして、何と言っても東京ディズニーリゾート（TDL）の存在によって全国に名が知れ渡り、一日に数万人が訪れる市になりました。

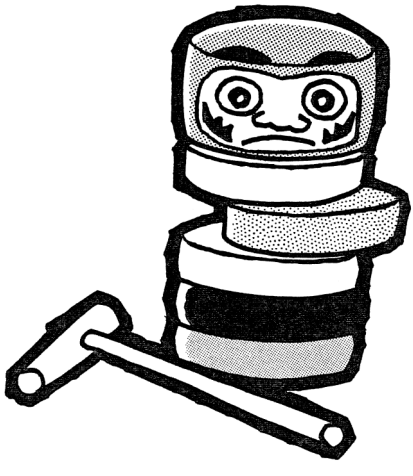
このような地域、それもTDLまで歩いてもわずか15分の場所に浦安鉄鋼団地は立地しています。組合の規約では、鋼材の加工・流通業者以外への土地の譲渡は禁止となっていますが、法律上は準工業地域で、ホテル、マンション、遊戯施設などほとんどのものが、建設可能な地域でした。したがって、土地の開発業者からの提案と称する、マンション建設やホテル、なかにはセレモニーホールを作りたいなどというアプローチが後を絶ちませんでした。しかし、組合設立以来40年にわたって、団地創設の精神は引き継がれ、規約を破る組合員は無く、「鉄の街」として団結を保ってきました。

しかし、平成15年11月、ある組合員の土地売却によりマンション建設の計画が持ち上がりました。組合では、当事者に強く計画撤回を求めるとともに、市への陳情も行いました。幸い、浦安市では、かねてからこの地域一帯での住居系建物の建設を禁止する「特別用途地区」の指定を準備していて、翌年の６月にこれが施行され、この計画は撤回されました。しかし、今度は、同じ場所にホテルが建設されるという事態が発生し、実際にホテルの建設は強行され、現在に至っています。組合ではこれと並行して、住居系以外の建物の規制も必要であるとの認識のもと、「地区計画」の制定を進めてまいりました。平成16年の８月に各地区の代表で構成する検討委員会を設置してから、翌年５月の総会までに、延べ14回の会議を重ねました。その結果、総会において全会一致で決議された「地区計画」は、平成18年１月、浦安市によって都市計画決定されました。「地区計画」の内容は、多岐にわたっており、この紙面ではご紹介できませんが、ひと言でいうと、

鉄鋼団地内では①倉庫②工場③事務所以外の建物は建設できないという、厳しい内容のものです。これによって、住工混在や商業施設、ホテルなどの進出で団地が虫食い状態になり、各社の操業環境が損なわれるという事態を回避することができました。議論の過程では、組合員から賛否両論、いろいろな意見が寄せられましたが、最終的には40年前の鉄鋼団地建設の理念を理解して頂き、組合員の総意として行政を動かすことができたのでした。

全国の工業団地、流通団地でも、住工混在や異業種の進出によって、さまざまな問題が発生しているということを耳にします。少しでも、ご参考になればと思い、当団地での事例を記させて頂きました。

皆さまの、この一年のご多幸と事業のますますのご発展をお祈りいたします。



新春随想

カナダのオーロラ鑑賞記

企業組合シニア旅行カウンセラーズ
専務理事　本荘　大紀

今年米寿を迎えた母が、オーロラというものを一生の思い出にぜひ観たいと言う。大体オーロラは、極北の地域で真冬の極寒の時期に見えるもの、とのイメージがある。元気な母でも、零下何十度の酷寒には耐えられないだろう。

また、凍りついた道ですべってころんで骨折でもされたら困ると思い、とりあわないでいたが、調べてみるとオーロラは真冬だけ見えるものではなく年中、出現しているということが分かった。いつでも出ているのだが、非常に淡い光なので、闇夜でなければ肉眼で見ることができない。オーロラの見える地帯、いわゆるオーロラベルトは、同時に白夜の地域であり、６月～８月の中旬までは太陽が沈まず、夜というものがない。したがって、この白夜の時期さえはずせばいつでもよいわけで、なにも年寄りが無理に極寒の時期に行く必要はないのである。そんなわけで、９月４日発Ｊ社企画の「ユーコンの秋ツンドラとオーロラ７日間」に申し込み出かけることにした。

ツアーは一行28名の大団体で、添乗員も同行する。このツアーシリーズは３日前にも同じ行程を満員で出発したと聞き、あらためて、日本人旅行者のオーロラ熱に感心する。カナダ航空で成田を出発、一路バンクーバーへ向かう。乗り継いでさらに２時間半をかけ、オーロラベルト内の小さな町ホワイトホースに到着、ここで１泊して翌日はさらに500キロメートル北のドーソンシティなる町までバスで行き、ここで２泊、またホワイトホースに戻り２泊する、という行程である。つまり５泊７日のスケジュールだ

から、オーロラを見るチャンスが５回はあるということになる。統計上、オーロラ遭遇率というものがあり、気象条件やその他が整っていて30％なのだそうである。ということは、３回のチャンスでまず１回は確実なのだ。しかし、ホワイトホースまでの飛行中、下界は厚い雲が閉ざし、鮮やかな秋色に覆われているはずのツンドラ地帯の景色は一切見ることができず、嫌な予感がする。オーロラは曇りや雨空では全く見ることがかなわないのである。

さて、ホワイトホースに到着してみると不安は適中し、雨模様の悪天候である。ホテルのロビーには、たまたまシリーズ先発組の日本人旅行客一団がいて、誰からとなく彼らの成果を聞き始めた。彼らは初日にものすごい迫力あるオーロラを見ることができたそうで、わがメンバーからは羨望の声が挙がる。もっとも羨ましいと同時に「よし、われわれにも同じチャンスがあるはず」という根拠のない自信も生まれてくるからおかしなものだ。

夕食後、いよいよ第１回目の鑑賞ツアーに出発する。バスで町の郊外へ約30分の道程。着いたところは、真っ暗で様子がはっきりしないが、何か山の上の牧場の様な感じで、日本人観光客用に牧童小舎を休憩所風に改造した建物へ案内され、オーロラのお出ましを待つということになっていた。時刻は夜の11時。時折小雨がパラつく。星は全く見えず、寒い。といっても気温は摂氏10度くらいで、スキーウェアに身を包んでいれば全く問題がない。小屋の中は暖房がよく効いていて、飲み物とお菓子が振舞われた。小屋の前の小さな広場では、キャンプファイヤーよろしく薪が組まれ盛大に炎を上げている。

初対面のメンバー同士も次第にうちとけて、親しく言葉を交わすようになった。驚いたことに、ほとんどがオーロラリピーターで、北欧などのオーロラ名所も経験済み。そういう人たちは、過去には一度も見られなかったケースも何度かあったようで、万事鷹揚にかまえている。圧倒的にシニア層が多数で、まず平均年齢は65歳を超えているだろう。同行したわが娘が最年少と思われ、彼女は憮然としていた。結局、この夜は天候回復せず、午前２時すぎにむなしくホテルに引き揚げた。

まったくついていないことに、カナダ北部に低気圧が居座ったと見えて、ドーソンシティの２日目、３日目、ホワイト

ホースに戻って４日目の夜もまともなオーロラは一度も見られずということになってしまった。彼のリピーター氏は、こともなげに「まあ、こういうこともありますよ。」というが、老い先短い母には、また次のチャンスがあるとも思えず、次第にあせりが濃くなってくる。

最終日、天候は打って変わって晴天。期待に胸膨らませ、例の山小屋に到着し、待機する。満天の星で、北に北斗七星も力強く光芒を放っている。月齢も新月で気象条件はすべて整った。しかし出ない、出ない。帰る予定の午前２時を過ぎてもまだ出ない。迎えのバスも到着して、添乗員氏が気の毒そうに「もう戻りましょう」と言う。皆、あきらめて足取り重くバスに乗り込み、出発、という正にそのとき、だれかが、「出た」と大声を挙げた。バスから転がるように降りて見ると、いましも北方の天空一杯に緑白色の巨大な光のカーテンが厳かに現れてきた。みるまに西から東へ180度の視界で、淡い赤、紫色も混じった光のカーテンが渦巻くように回転し始める。いっとき騒がしかった皆も今は放心したように押し黙って、この圧倒的な光の一大ページェントを凝視している。わが老母はといえば、これもこの壮大なシーンを目に焼き付けようとするかのように一心不乱に見つめている。私も言葉で表現しがたい充足感に浸されていった。